

『新編武蔵国風土記稿 荏原郡巻4』
(1999 年 文献出版より転載)

主体部

古墳に造られた埋葬施設のこと。1つの古墳内に主体部が複数ある場合、第1主体や第2主体と呼び分けたり、特に古墳を造営したと考えられる人物を埋葬したものを中心主体部と称することがある。野毛大塚の場合、第1主体部に埋葬されたのが古墳造営主と考えられる。

副葬品

遺骸に副えて置かれた鏡や武器武具や玉類などの品々をいう。主に埋葬施設である棺の中に埋納されたものを指すが、厳密には、埋葬時の葬送儀礼に伴って棺外に供献された品々をも副葬品とみなすことができる。

*1 当時、石棺発掘の知らせを受けて現地に赴いた帝国博物館出張員（坪井正五郎氏とする説あり）の記録が『考古学会雑誌』に載せられている。その記事によれば、石棺からは、多量の石製模造品の外、甲冑、直刀、玉類などが副葬されていたという（『武蔵国荏原郡玉川村上野毛古墳発掘品』『考古学会雑誌』第1巻第11号 1897）。

周濠

古墳のまわりに堀り廻らされた濠のこと。周溝とも。周濠は墓域を示す目的で掘削された構築物と考えられるが、そこから排出された土は墳丘の築造に利用された。周濠を伴わない古墳もある。

調査の発端

野毛大塚古墳については、江戸時代後期の地誌『新編武蔵国風土記稿』に「東大塚」という名称で出ており、以下のような記載がある。

東大塚 字原ニアリ、小山ノゴトク丸石ニテ築アゲ、高二丈許ナリ、此邊ヲスベテ古壘ノ跡ト云傳ル所ナリ、サレバ村民等ヲリトシテハ、布目瓦ノ如クナルモノ、瀬戸物ノカケ、又ハ何モノトモワカネド、ウヅ巻ノカタアル土器ナド、堀出セシコトモアリシト、此所スベテ臺ノ上ナレバ、多磨川ヲ眼下ニ見下シ、又塚ノ上ヨリ望バ、品川沖ノ海原ヲカケ、遥ニ安房上総ニ及ベルサマ、絶景ノ地ナリ、ハタ要害ニモナルベキ所ナレバ、土人ノ古壘跡トイヒ傳ルモサモアルベシ、サレドソノ事實ハ詳ナルコトヲ知ベカラズ、(下野毛村の条 ルビ、下線は筆者)

記述は、古墳を取り巻く当時の環境がきわめて簡潔に描かれており、付近の村人にとって、野毛大塚が広く知れわたった存在であったことを物語る。また、「小山ノゴトク丸石ニテ築アゲ」の表現からは、当時まだ墳丘が葺石で覆われていた様子が窺われる。因みに、文中の「布目瓦ノ如クナルモノ」は埴輪片、「ウヅ巻ノカタアル土器」はおそらく縄文土器を指したものである（野毛大塚の立地する場所は縄文中期を中心とした下野毛遺跡と重なっている）。当時野毛大塚が墳墓ではなく、砦などの古壘と見られていたことなども興味深い。

野毛大塚古墳が一躍世間の注目を集めるようになったきっかけは、明治30年（1897）に、地元の青年3人が好奇心に駆られて墳頂部を掘り出したことであった。この時、石棺（現在の第2主体部）が発見され、そこから多量の石製模造品（64頁参照）をはじめとする副葬品が出土して、これが学会に広く知れわたることとなった*1。そして、その出土品は、すべて帝室博物館によって引き取られ、収蔵されたのである。しかし、その後墳丘測量を主とした調査や、隣接する道路内の埋設管工事に伴う周濠の部分調査などが行われたものの、平成を迎えるまで本格的な発掘調査は実施されないまま長い年月が経過した。



野毛大塚古墳と等々力ゴルフリンクス
昭和11年（1936）

（『世田谷区史料 第8集 考古編』より）

昭和6年8月、目黒蒲田電鉄が大塚を中心としたゴルフ場を開設した。



終戦直後の野毛大塚古墳

昭和20年（1945）頃

（『世田谷区史料 第8集 考古編』より）

戦争の激化に伴い、昭和14年にゴルフ場は廃止、戦後にかけて畑地に転用された。

保存整備後の野毛大塚古墳航空写真

平成元年から4年まで発掘調査および保存整備が行われた。



保存整備後の野毛大塚古墳全景

1 棺内副葬品

第1主体部棺内の副葬品は、銅鏡・銅釦^{どうくしろ}・石製模造品^{まがたま}・勾玉^{くだたま}・管玉・丸玉・白玉^{うすだま}などの玉類^{たてぐし}、豎櫛^{とうす}、刀子、そして鉄刀・鉄剣・鉄槍・鉄鉾^{てつほこ}・鉄鏃^{てつぞく}などの武器と甲冑類の武具である。これらの副葬品は、すべて長さ 7.45m の長大な割竹形木棺内の北東小口から約 4.4m までの範囲に限定的に配置されており、それより南西部にはまったく遺物が収められていない。このことから、副葬品の棺内配置については、一定の規範が存在したと考えられる（23 頁図参照）*1。

続く第3主体部では、甲冑・鏡・玉類・豎櫛などがまったく副葬されず、石製模造品と大量の武器類に特化した副葬品のあり方を見せる。通常の首長墓とは異なる状況に対して、これが第1主体部被葬者の軍事を補佐した人物の陪葬^{ばいそう}、または野毛の最高首長権を失った首長の埋葬施設と捉える見方がある（甘粕 1999）。

明治 30 年に発掘された第2主体部(箱形石棺)では、石製模造品 250 点のほか、甲冑・武器・玉類などが出土しているが、その詳細については不明である（現在、東京国立博物館所蔵）。平成時の調査では、石棺周囲の粘土や攪乱層^{かくらん}の中から白玉 25 点とガラス玉 1 点が出土している。これらはいずれも第2主体部埋葬時に伴ったものと考えられる。

第4主体部では、鉄刀と鉄槍各 1 点と水晶製の丸玉 2 点が出土している。

（1）武具（甲冑）

野毛大塚では、第1主体部と3番目の埋葬施設である第2主体部から、甲冑が出土している。前者は長方板革綴短甲^{ちやうほういたかわとじたんこう}と頸甲^{あかべよろい}・肩甲^{かたよろい}、そして三角板革綴衝角付冑^{いたかわとじしょうかくつきかぶと}と鉾留^{しころ}衝角付冑とのセット、後者については明確ではないが、一説には三角板革綴短甲と三角板革綴衝角付冑とのセットとする見解がある*2。因みに、2番目の埋葬施設である第3主体部では、第1主体部をはるかに凌ぐ武器類が出土しているが、甲冑は出土していない。

第1主体部の甲冑は長大な粘土槨のほぼ中央、被葬者の足下と見られる位置に置かれていた。甲冑の足位配置についても、同時期の畿内の古墳に特徴的に見られる副葬形態であることが指摘されている。古市古墳群の中の盾塚古墳、また古市・百舌鳥古墳群被葬者と強いつながりを持つといわれる豊中大塚古墳（摂津）などでこの配置が確認されている（25 頁図参照）。



甲冑・鉄製武器類・石製模造品
出土状況（第1主体部）

*1 第1主体部では、複数回、棺外副葬行為のあったことが確かめられている。棺外副葬品としては、白玉・豎櫛、綾杉状や線状の漆の皮膜が確認されている。この皮膜は、革製の盾に塗布されていたものと推定される。

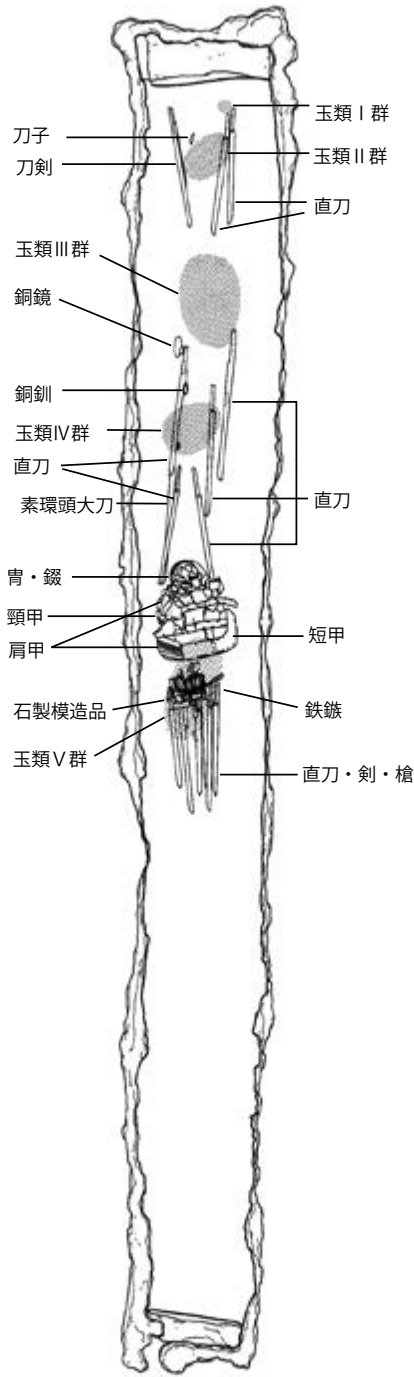
陪葬
陪は、したがう、付きそうの意。陪葬は、貴人の墓近くに陪従者（重臣・近親者）が埋葬されること。古墳の場合、主墳に対して、陪従者の墓を陪塚^{はいちよう}と称する。

攪乱層
遺跡内の覆土（遺構内に積もった土）および自然堆積層が、後世、自然や人為的な要因によって乱された層。

*2 野毛大塚の石棺（第2主体部）から出土した甲冑について、田中新史氏は、帝室博物館報告者が「久津川村発見の甲冑に類する」と記したことに基づき、これを三角板革綴短甲と鉾留衝角付冑の組み合わせと推定した（田中 1978）。しかし、野毛大塚の本報告書の中で、橋本達也氏は、京都久津川車塚古墳出土の複数の甲冑を見直し、短甲は三角板革綴でよいとしても、冑は三角板革綴衝角付冑であった可能性があると指摘している。



第1主体部（中央）と第2主体部（右）



0 1 m

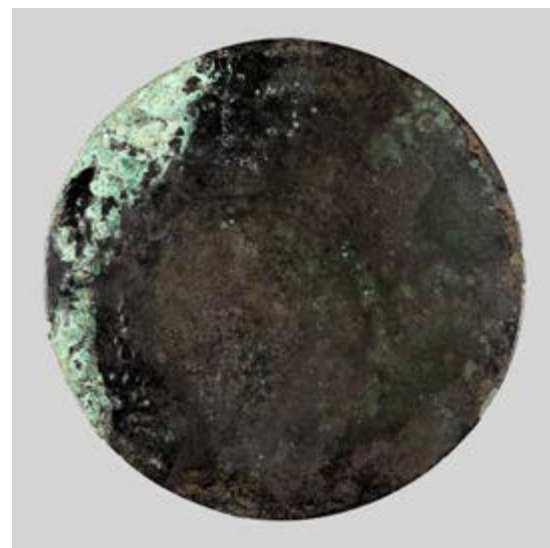
第1主体部 棺内副葬品出土状況

(4) ないこうかもんきょう 内行花文鏡

鏡は第1主体部で内行花文（連弧文）の銅鏡が1面出土している。棺内の被葬者の肩部付近と思われる場所の右側に鏡面を内側に向けた状態で置かれていた。直径11.5cmで背面内区には、金文体で右回りに「長宜子孫」（長に子孫に宜しからん）の銘文がある。鏡式の特徴から、後漢時代後半（2世紀）に製作された中国鏡の可能性はある。



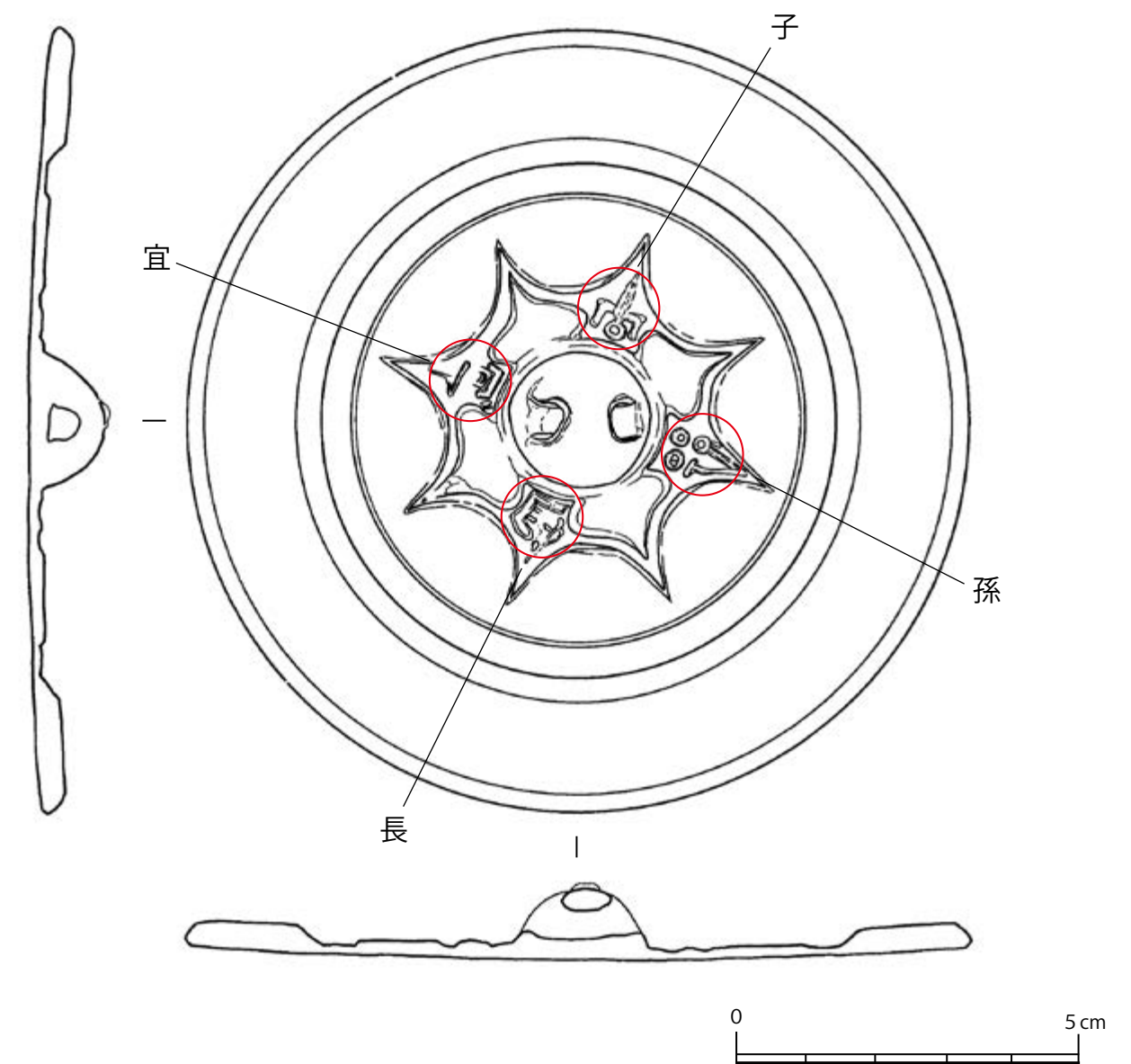
56 第1主体部 内行花文鏡（背面）



同（鏡面）



第1主体部 内行花文鏡出土状況
写真右上に見える円形状のものが
内行花文鏡である。



（５）石製模造品

石製模造品は実用の農工具や様々な器物を模して作った祭祀用の道具で、古墳時代中期を代表する副葬品の1つである。多くは軟質の石である滑石を素材とし、一端を穿孔して小穴を開ける。この小穴（懸垂孔^{けんすいこう}）に緒を通して模造品同士を繋げ、櫛などに掛けて祭祀を執行了と考えられている。初期の模造品は精緻で少器種・少数が副葬される傾向があるが、次第に粗製化が進み多数の同一器種が副葬されるようになる。

石製模造品を副葬する例は関東とともに畿内を中心に分布するが、河内や和泉の新興政権以前の大和政権が採用した祭祀形態の1つであったと考えられる。野毛大塚に先行して石製模造品が副葬されたのは、関東では群馬の白石稲荷山古墳^{しろいしなりやま}のみである。古市古墳群の中では、成立期の津堂城山古墳^{つどうしろやま}にあるが、以後はその存否が分かれ、野中古墳にはあるが、盾塚古墳には見られないという相違がある。

野毛大塚では第1→第3→第2主体部の順に連続して石製模造品が副葬されるが、1つの古墳で連続副葬された例はきわめて珍しい。野毛大塚の模造品にも精緻なものから粗製品へという傾向が、また、特に刀子形模造品などにおいて同一器種多数の傾向が窺われる。第2主体部に副葬された模造品については、数の多さとともに、槽（ふね）^{そう}・案（つくえ）^{あん}・履（下駄）^りなどの特殊な器種の存在が目される。因みに、第1主体部出土の石製模造品は、畿内周辺で作られたものが搬入された可能性のあることが指摘されている。

模造品の副葬は、今のところ野毛大塚以後、首長墓と目される天慶塚と八幡塚の2古墳で確認されており、当地ではこれが首長墓を示す指標となり得る可能性もある。石製模造品は、祭祀を通した畿内との交流を示唆するものでもあり、今後産地同定分析などについても、注意を払う必要がある。



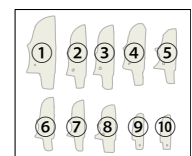
第1主体部 石製模造品出土状況



57 第1主体部 石製模造品（勾玉・鎌・手斧）
右上の鎌形模造品：長さ 11.3cm



58 第1主体部 石製模造品（刀子）
刀子形模造品には、線刻による鞘表現があるもの（①、⑤、⑦）と、鞘のない抜き身状態を表現したものがある。
左上：長さ 11.6cm





83 朝顔形円筒埴輪
口径 50.6cm
高 (85.0cm)

朝顔形円筒埴輪は、円筒埴輪の上端を^{すぼ}め、その上部に朝顔形に開いた口縁部を付け足した形態の埴輪である。普通円筒埴輪列の中に何本か置きに配置されたと考えられる。底部から口縁部まで完形に復元された個体はない。この埴輪には、B種ヨコハケが顕著に認められる。

埴輪を整形する最終段階で、その器面を板の小口で撫でて調整を加える。その際、刷毛で撫でたような筋が着く。これを「ハケ」と称す。「ハケ」は撫でた方向により「タテハケ」「ヨコハケ」「ナナメハケ」などに分類する。さらに「ヨコハケ」を大別すると、A種、B種、C種の3種類に分類できる。ここでは、この3種類の違いについて簡単に説明しておく。

A種ヨコハケ

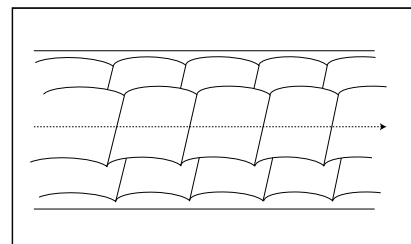
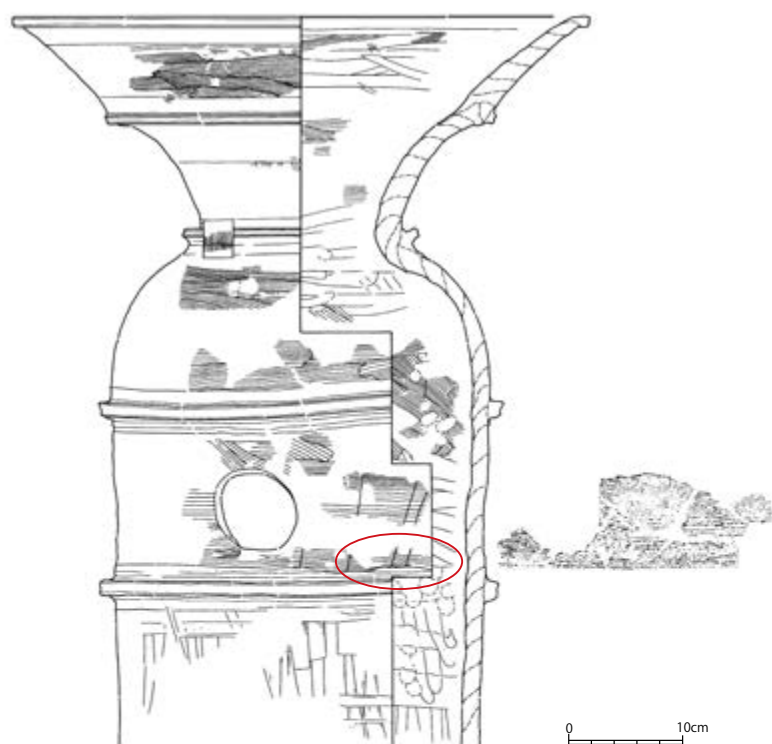
断続的に横ないし斜め方向に撫でる。

B種ヨコハケ

器面から板を離すことなく撫で、一定間隔で板を止めて、止め痕および継ぎ痕を残す。

C種ヨコハケ

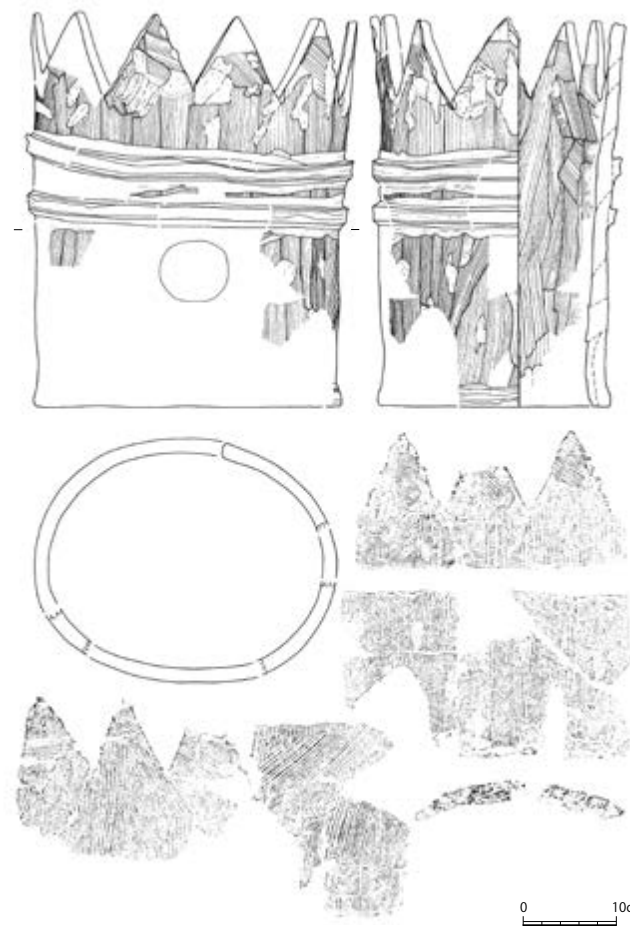
一気にぐると一周撫でる。



〈B種ヨコハケ〉



84 柵形埴輪 口径長辺 35.0cm
口径短辺 26.7cm
高 44.6cm



85 柵形埴輪 口径長辺 34.0cm
口径短辺 (27.0cm)
高 41.0cm

柵形埴輪は、上端に鋸歯状の山形突起をもち、その直下に2列の接近した突帯を巡らせる特殊な形状の埴輪で、横断面の形は楕円を呈する（楕円埴輪）。野毛大塚では造出部の外周部のみに配され、その内部空間を^{いによろ}囲繞するように設置されている。この形の埴輪は、前期後半から中期にかけて畿内を中心に分布し、前方部や造出部付近で確認されることが多い。

近年、^{かこいがたはにわ}圀形埴輪（75頁図参照）と呼ばれる、特殊な形状の埴輪が畿内周辺に偏在していることも明らかにされている。これもまた、前方部や造出部から出土する傾向がある。圀形埴輪には、塀や扉の上端に、山形突起がつけられていることが多く、この点で柵形埴輪との共通要素が認められる。因みに、野毛大塚と同じ帆立貝形古墳である古市古墳群中の鞍塚古墳からも同種の圀形埴輪が出土している。

また、野毛大塚第2主体部出土の中に、導水施設（水路と槽）を象った石製模造品（東京国立博物館蔵）が含まれていることも注目される。導水施設は、王や首長の祭祀に関係するといわれ、この形をした埴輪が圀形埴輪と一緒に出土することが多い。

野毛大塚出土の導水施設形石製模造品や柵形埴輪の存在は、こうした点で、畿内的特徴を色濃くするものであるといえよう。